



写真 1



写真 2

写真 1 帽子をかぶって遊ぶ子ども達

写真 2 Tシャツ

写真 3 人形の衣服の選択



写真 3

写真 4



写真 4 Tシャツの選択の様子

写真 5 Tシャツの選択の様子

写真 6 人形の衣服の選択の様子

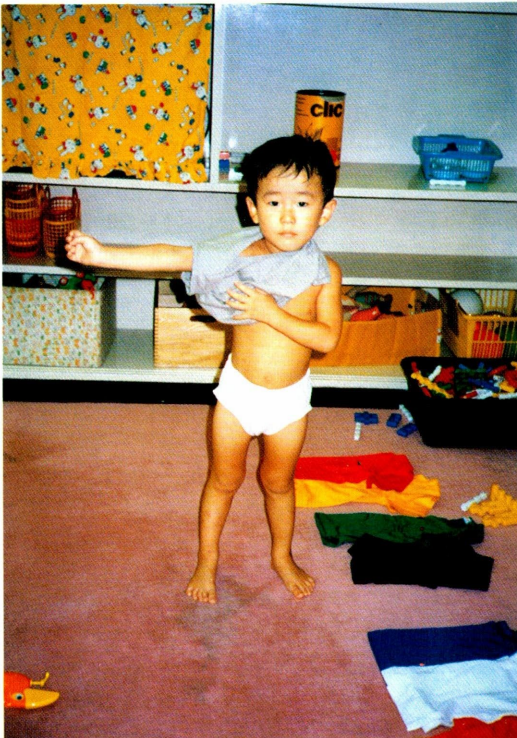


写真 5



写真 6

幼児の被服における関心

高橋尚子

The Studies of Concern about Clothing for Early Child

Naoko Takahashi

はじめに

心理学者 E. B. ハーロックは、子どもの衣服について次のように述べている。「子どもは、自分の衣服を着なければならないものとしてよりも、自分の宝物として考えるようになり、衣服を通して自分をみるようになる。子どもが好きな衣服や誇りに思う衣服は、子どもの道徳性を高めるし、自信を増大させ、子どもが嫌がったり、他の子どもからからかわれるような衣服は、子どもの自信を喪失させ、劣等感をもたせることになる」。

以上の言葉を私がこの論文を書くにあたっての基調としてゆきたい。

子ども服というのは、たいがいの場合その子どもの周囲の大人が選んで着せるが、子どもは実際どのような好みを持っているのだろうか。

そこで子どもの衣服に関する好みを知るべく本学（東京家政大学、ナースリールーム）ナースリールームの2歳児、3歳児を対象に、色という点に中心をしぼり、調査することにした。

全調査共通の対象児

A 男 S 57. 5. 8生

B 男 S 57. 6. 25生

C 女 S 57. 7. 13生

D 男 S 57. 9. 26生

E 女 S 58. 7. 14生

以上5名

1. 帽子における調査

幼児が自分の身につける物の色に関して、どの程度関心があるか、また何故その色を選ぶのか調査する第1段階として、対象児が外に出る際にかぶる9色のカラー帽子を対象として11回にわたり、各自がどの色の帽子を選択するか調査を行なった。

方法

幼児が外に出る際に、保育者に各自が好きな色の帽子を選択するよう声をかけてもらい、幼児が必ず自分で帽子を選んでかぶるようにした。

調査期間

昭和60年4月～6月

調査回数

11回

対象の帽子の色

ピンク (濃)
ピンク (淡)
赤
みどり
黄みどり
青 (濃)
青 (淡)
オレンジ
黄

全9色

結果

後ページの表1参照

考察

帽子を選ぶ際、いつもきまった色を選ぶ子どもと、異なる色を選ぶ子どもがいることがわかった。好きな色の明確な子どもは、常にきまった色の帽子を選んでいたのである。

また、その時によって選ぶ色が違う子どもでも、選ばない色というのはあるので、色に対するなんらかのこだわりはあるように思えた。

どの帽子を選ぼうか迷うとき、あるいは自分の選びたかった色を他の子どもが選んでしまったときには、黄、オレンジなど、あたりの軟かい色を選んだようであった。

対象児E(女児)の場合、年齢が他の子どもよりも1歳下ということもあり、同様に女児である対象児Cに近いものを選ぶ傾向がみられた。

2. Tシャツにおける調査

次に実際、子どもが衣服として身につける場合にはどのような色を選択するかを調査した。

方法

市販のTシャツ(2100円~2500円)で、ポイントや柄のない無地のTシャツ9色9枚を準備。

[サイズ 95 cm~100 cm, 3, 4 歳児用]

まず調査Iとして、保育室に9枚のTシャツを置き、全員一斉に各自の好きなTシャツを選び着るようにした。

次に調査IIとして、1人ずつ9枚のTシャツの中から、自分の好きな色のものを1枚選んで着るように、他の子どもも、残りのTシャツを順番に1人ずつ着るようにした。

調査期間

昭和60年7月~10月

Tシャツの色

赤 (I)
赤 (II) ポケット有り。色やや。
グレー
白
青
みどり
黄
ピンク
黒

全9色

結果

後ページの表2, 表3参照

考察

まず調査I, IIを通してわかったことは、選択する色に幅があっても、計6回の選択の機会の中で、青と黒は誰も選択しなかったということである。このことから、2歳児、3歳児でも夏という時期に、暑苦しく見える色は、さける意識が働いたのでは、ということが考えられた。調査前の予想としては、男児の中には帽子の調査の結果から推測して、青を選択する子どもがいるのではないかと考えたが、濃い青だった為か、この推測ははずれた。

また子どもが、グレーという濁色を選択す

るだろうかという疑問があったが、これも、調査の結果好きな子どももいることがわかった。衣服という立体になってしまうと、必ずしも濁色で子どもにきらわれるということはないのではないかと思われた。対象児Aがこの例であるといえるだろう。

対象児Cについては、帽子と同様ピンクを選び、ピンクという色自体が好みで、Tシャツもピンクという色を基準に選んでいることがわかった。

対象児Bについては、Tシャツの色よりも、ポケットのついているものと、ポケットのついていないものという基準でTシャツを分けていたようで、色よりも、むしろポケットというデザインにこだわっていた。

そして、子ども達の間で2、3回同じ子どもが同様のTシャツを着ると、〇〇色のTシャツは、〇〇ちゃんのものという所有感が出てくることがわかった。

日常から衣服について意識している子どもは3歳児でも、9色のTシャツをただ色としてとらえて選ぶのではなく、衣服として選ぶことができるようであった。

3. 人形における調査

前回の調査では、子ども達に実際にTシャツを選択してもらったわけだが、この章では人に着せるとしたら、自分が着るときと、あるいは帽子と、どのような違いがでてくるかということで、パネルに人形を置き、その人形にTシャツを着せるという形体で調査を行なった。

調査期間

昭和60年10月

調査回数

各自1回（計5回）

人形の衣服の色（帽子、Tシャツに準ずる）

茶

赤
ピンク
黄
青
黒
グレー
白
紫
みどり
オレンジ

計11色

結果

後ページの表4参照

考察

前章のTシャツの選択では黒や青を選んだ子どもはいなかったが、この人形にTシャツを着せる調査では、黒や紫を人形に着せる子どもがいた。これは自分が着るわけではないのでTシャツより安易に選んだということが、多分にあると思われるが、10月という季節になっていた為、黒などの濃い色に視覚的抵抗が少なくなったということも考えられる。そして黒、紫が比較的手にとりやすい位置にあったということも考慮しなければいけないと思われた。

また対象児Cについては、この調査を実施した当日Cが着用していたベストがオレンジ色だった為に、人形にもオレンジを着せるといってオレンジ色の服を人形に着せた。Cについては、普段からピンクが好きで、Tシャツ、帽子の調査ともピンクで通してきたが、ここではオレンジを選んだ。このことから年齢が低い子どもの場合特に、その日の服装と色の選択は関係があるように思われた。

この調査で、子どもは自分で着るという基準がある場合の方が、単純な色選びより慎重になる。また子どもにとって衣服という立体の色は、平面的な単純な色彩とは違うのだから

うか。

4. おり紙における調査

次に純粹に子どもが好きな色を調査すべく、おり紙を使い子ども達に好きな色を選んでもらった。

調査期間

昭和60年10月～11月

調査回数

各自1回(計5回)

おり紙の色

茶

赤

ピンク

黄

黒

グレー

白

紫

みどり

オレンジ

人形の衣服と同様の11色

方法

人形における調査と同様に研究室におり紙を用意し、子ども達1人ずつにおり紙を選択してもらった。

結果

後ページの表5参照

考察

人形にTシャツを着せるのと同様に、自分自身が身につけるわけではないので、安易にとりやすい位置にあるものや、瞬間的に目に入る色のものを選ぶ傾向にあったようだが、今回の調査の中ではこの調査が一番純粹に色の選択といえるだろう。

C, Dはピンクにみどりと日常絵を描くときにも使いたがり、かつ帽子, Tシャツの調査でも選んだ色を選択した。

A, Bのグレーは、AはTシャツの選択と共通していたが、Bは位置でグレーを選んだようであった。

5. 全調査の考察

さて、これまでの章では各調査を1つずつみてきたが、この章では全調査をまとめて、対象児各々を中心とし、衣服への関心ということでTシャツの調査を基準にしなが、各調査の相関を考えてゆきたい。

対象児A(男S57.5.8生)

帽子における調査では、赤1回、みどり3回、黄4回、青(濃)1回、オレンジ2回。Tシャツの調査では調査I, II, 計5回全グレー。人形の調査では黒。おり紙の調査ではグレー。と全体を通してグレーが多く、帽子の調査も含めて大きく考えると、青(濃)、みどりがあるもの、濃い色を選択することは少なかった。

また、彼は普段から上衣とズボンの組み合わせを意識していたりするので、今日の洋服がカッコイイかどうか、保育者に確かめたりすることもあるので、彼がグレーのTシャツを選ぶのにはそれなりの日常の衣服に対する感覚があるように思えた。

帽子における調査で、彼の場合、その日に選択しなかった色が他の子どもに選ばれてしまったときなどは、特にオレンジや黄を選ぶことが多かったようだ。そして彼の場合、身につける衣服の色を選ぶときと、単に平面的な好きな色を選ぶときでは、あきらかに意識が違うのではないだろうかということが、全調査を通じて想像できた。これは先にも述べたように普段から服装を意識しているからのように思える。

対象児B(男S57.6.25生)

帽子における調査では、ピンク(濃)1回、赤2回、黄みどり2回、黄1回、青(濃)4回。Tシャツでは、調査I, IIを通してみどり3回

黄1回。ただしみどりと黄は同様の型でポケットがついており、彼は色よりもむしろTシャツのデザインを基準に選択していたようである。

人形では紫。おり紙ではグレーと、これらは両方とも、色を選ぶというよりは、安易に手のとどきやすい位置のものを選んだようだった。彼の場合も対象児Aと同様に、身につける場合だと慎重に選ぶが、色の好みとしては特にこだわるのではなく、むしろ型に好みに向くようであった。

対象児C (女 S 57. 7. 13 生)

帽子における調査ではピンク11回。Tシャツでは調査I、IIを通じてピンク2回。人形ではオレンジ。おり紙ではピンク。彼女の場合ピンクが一貫して好きな色であり、ものを選択するときピンクということが選択の基準になっていた。ただしオレンジのベスト(祖母に編んでもらったと自慢の)を身につけていた日は、そのベストを意識して、人形にもオレンジの服を着せた。

このことから、衣服の色というのは低年齢児の場合、ある程、絵などを描くときに使用するクレヨン、絵の具等の色の使い方に影響を与えているのではないだろうかと考えた。

対象児D (男 S 57. 9. 26 生)

帽子における調査では、みどり6回、黄みどり2回、オレンジ2回。Tシャツでは、調査I、IIを通し黄1回、グレー1回、ピンク1回、白1回、みどり1回。人形ではオレンジ。おり紙ではみどり。

彼の場合、本来好きな色はみどりであるが(みどりが好きだと本人がよく言う)、帽子においてはこの傾向がほぼ読みとれるが、他の調査では、ばらばらである。これは、彼の月齢からくる子ども同士の力関係から、自分より力の強い対象児A、Bが選択するものは、たいがい遠慮してしまうということも選択のちらばりに影響していると思われた。Tシャツでいえば1人の子どもが同様のTシャツを2回くらい着用すると、何色のTシャツは誰々のというような所

有感が子ども達の間で生じてくる。ゆえに彼は、たとえばグレーのTシャツを着たくても、Aが近くにいれば彼に自分の着たいTシャツを選ぶように声をかけても、Aを気にしてやめてしまったりすることがあった。

また彼の場合もAと同様に選択したかった本来の色がない場合はオレンジを選んだようである。

対象児E (女 S 58. 7. 14 生)

帽子における調査では、ピンク(淡)6回、ピンク(濃)、黄みどり、赤が各1回、黄が2回。Tシャツでは調査Iで赤I、調査IIでみどり。人形ではピンク。おり紙はピンク。

全体的には、ピンクが好きなのだが彼女の場合、他の子どもと1歳の年齢差があり、好きな色などが、特にきまっているというより、女子2名ということもあって対象児Cに影響されピンクを選択するということがあったようである。このことから2歳になりたてでは、色の好み、あるいは衣服の好みなども、それ程強くないことがかる。2歳~3歳の間に色彩の感覚、衣服の感覚はずいぶん伸びるのではないかと思われた。

以上をまとめてみると、子どもが衣服の色を選ぶとき、あるいは色彩だけとは言わず衣服を選ぶときといった方が良いかもしれないが、衣服を衣服という立体で着るということ意識して選択する子どもと、あくまで好きな色として平面的な色も、立体的な衣服も一つの色を基準に選ぶ子どもがいることがわかった。

また色よりも衣服は、デザインを意識して選ぶ子どももいることがわかった。ゆえにポケットなどのポイントやアクセントは、子どもが自分自身で衣服を選ぶときの基準になることも大きいにあるということがいえるのではないか。

衣服に関する子どもの好みは、私の予想としては、全員が好きな色=好きな衣服の色なのではないかと予想していたが、これは半分はずれた。3歳くらいになると、だいぶ服装ということ子どもが意識しているということがわか

り、対象児Aから対象児Eまでの月齢差を考えると2歳～3歳の間に衣服に対する関心はずいぶん高まるのではないかと考えられた。

衣服という身につけるものでも、子どもは目につきやすいピンク、黄などのTシャツを選択するのではと考えたが、けっこう着ばえを意識しているということもわかった。

服装のセンスというのは普段から身につけているものが多いようなので、親のセンスがかなり影響すると思われた。

衣服の色というのは身近なものだけに、人間の色彩感覚を育てる上で大切な役わりをはたしているのではないだろうか。

6. 終わりに

子どもは、大人の縮小ではないと常々言われているし、私もそのように考えてきたが、こと衣服に関しては、近年急速に、子ども服にも大人の流行がとり入れられてきた。

従来子ども服というのは、白、淡い黄、ピンク、青など明度の高い純色を中心にした軽い色調のものでしめられ、濁色は子どもに好まれないと言われていたが、今回の調査でこの定説は否定されつつあるのではないかと考えられた。

数年前までデパートの子ども服売場をのぞくと、先に書いたような淡い色調の服ときまっていたが、近年は大胆な赤や黄、またグレー、茶色などの濁色の子ども服も増えてきた。その衣服の傾向に伴い、子ども達も濁色に対する抵抗が少なくなったのではと考えられる。

日本の子どもの戦前と戦後の好きな色を見ると、戦前は青、赤、緑、黄、紫、橙の順になっているが、戦後は男子が橙、赤、黄、黄緑、白、青。女子は白、赤、黄、橙、水色、黒で、戦前と戦後では好きな色の順序が逆転している。戦後の調査もこれは昭和40年代のものなので、灰色などの濁色は、子どもが嫌うとされているが、現在では必ずしも子どもが濁色を嫌うとは言えなくなっているのではないだろうか。

衣服と人間の色彩感覚は相互の影響が大きい

し、子ども服をみれば、その国の文化の程度がわかるとまでいわれているので、子どもに衣服を着せるときには、その子どもの年齢に応じた良服教育をしてゆかなければいけないであろうと思われる。

そして、この調査をするにあたって何度か、子ども服の店、あるいはデパートの売場に足を運んだが、現在の日本の子ども服はシンプルなもの程値段が高く、マンガなどのキャラクター商品程低価格であった。本当に良い服装感覚を育てるためには、この現状ではたしてよいのだろうか。欧米では、子ども服に決してお金をかけはしないが、シンプルで色彩豊かなものが多いといわれている。キャラクター商品や飾りの多い日本の子ども服は、どこか現在の日本を象徴しているようでもある。

最後に、この論文を書くにあたって協力してくださったナースリールームの先生方、そして子ども達、指導してくださった宮崎照子教授に心から感謝していることをここに記してしめくりたい。

7. 参考文献

「生活習慣」 チャイルド本社

岡田正章，加藤照子編集

「入門色彩心理学」 現代心理ブックス

滝本考雄，藤沢英昭著

「子どもの衣食住」 チャイルド本社

加藤秀俊著

幼児の被服における関心

表 1 帽子における調査結果

対象児 帽子の色	A	B	C	D	E
ピンク (濃)		1	11		1
ピンク (淡)					6
赤	1	2			1
みどり	3			6	
黄みどり		2		2	1
黄	4	1			2
青 (濃)	1	4			
青 (淡)					
オレンジ	2			2	

表 3 Tシャツ調査Ⅱの結果

※○で囲んだ子どもがその日に主になった子ども

Tシャツの色	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回
赤 (Ⅰ)					
赤 (Ⅱ)					
グ レ ー	①	A	④	A	
白			D		
青					
み どり		②	③	D	⑤
黄				B	
ピ ン ク		D		③	
黒					

表 2 Tシャツ調査Ⅰの結果

T シャ ツ の 色	対 象 児
赤 (Ⅰ)	E
赤 (Ⅱ)	—
グ レ ー	A
白	—
青	—
み どり	B
黄	D
ピ ン ク	C
黒	—

表 4 人形における調査結果

人形の衣服の色	対 象 児
茶	—
赤	—
ピ ン ク	E
黄	—
青	—
黒	A
グ レ ー	—
白	—
紫	B
み どり	—
オ レ ン ジ	C, D

表5 おり紙における調査結果

おり紙の色	対象児
紫	—
オレンジ	—
黒	—
茶	—
赤	—
ピンク	E, C
みどり	D
黄	—
白	—
青	—
グレー	A, B